ICT 海外ボランティア会会報
第 107 号

2023 年 3 月 20 日（月）

URL: https://ictov.jimdo.com
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
昨今の世界情勢に思う～アルゼンチンびいきの独り言
当会顧問　飯塚　久夫

◆特別寄稿
岩槻日記(22)　当会特別顧問　石井　孝

◆海外グラフィティ
奥山真司の「地政学」から学ぶもの
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

◆海外便り
やどかり族の中国俳柳紀行序章(2)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之

◆第 17 回 ICT 海外情報ウェブサロン(講演会)模様　事務局

特別寄稿

昨今の世界情勢に思う～アルゼンチンびいきの独り言

当会顧問　飯塚　久夫

サッカーの FIFA ワールドカップ(W 杯)は 2022 年 12 月 19 日、アルゼンチンが 3 度目の世界一に輝いた。マラドーナを擁した 1986 年メキシコ大会以来のことである。

それを遡ること 10 日あまり、アルゼンチン高等裁判所は 12 月 7 日、クリスティーナ副大統領に道路建設汚職などの罪で、禁固 6 年の有罪判決を下した。また詐欺的な行政犯罪に責任があるとして、生涯にわたり公職に就く資格を剥奪した。さらに、848 億ペソの罰金を科した。ただし、不逮捕特権により実質的影響はない。

一方昨今、アルゼンチンの物価上昇率は深刻で、衣類や文房具などの日用品は日本より数倍の値段だ。パソコンひとつ買うにも、30 万円を超える値がつくため、多くのアルゼンチン人は買い物のために越境してチリなどの隣国まで足を伸ばすという。失業率は増加の一途を辿り、貧困率も 40%に達する勢いだ。アルゼンチンには政権に金を搾取されないため、給料を手渡しで受け取る人が 40%近くいると言われている。

以上の最近の状況は、コロナ禍前まで毎年アルゼンチンを訪れていた私には、実に象徴的な出来事である。

ブエノスアイレスの随所にマラドーナの像や土産物が溢れていた。いよいよマラドーナに替わってメッシの土産物になるのだろうか？

NEC ビッグローブ時代（約 15 年前）に NEC アルゼンチンのオフィス移転披露に訪亜した時には、当時のクリスティーナ大統領（現副大統領）が、開所式に来てくれ記念植樹までした。クリスティーナも NEC オフィスに来た時は実に美人だと思ったが、数年前の訪亜の際、クリスティーナの自宅はホテルから 2 ブロックほどの所だったが、丁度警察（アルゼンチンの FBI）の家宅捜索があり、野次馬で現場まで行った。あの美人が何でこんなに醜い顔になるのか？！とつくづく思ったりした。

数年前行った時は趣味のバンドネオン（5 台目）を 15 万ペソで買ってきたが、当時は 40 ペソが 1 ドル。今なら 180 ペソが 1 ドル、何ということだ！と言いたい（今はバンドネオン自体が値上がりしているかも知れないが）。

そもそも私とアルゼンチンとの関わりは、中学時代からの趣味のタンゴ。今と違って日本人がタンゴを広く聴いていた頃は、趣味が高じて、多くの CD 解説・雑誌記事やテレビの番組制作にも関わったが、現在ではさみしい限り。しかし、聴く人たちの集まりである「日本タンゴ・アカデミー」と、踊る人たちの「日本アルゼンチンタンゴ連盟」というのを主宰している。

今世紀に入り世界的には、社交ダンスのタンゴ（所謂コンチネンタル・タンゴ）ではなく、アルゼンチン・タンゴのダンスブームが復活しており、昨年 9 月、ブエノスアイレスで行われた世界選手権大会には世界から 500 組が出場し、50 万人の観客が訪れた。この分野でもかつては“タンゴ第二の故郷”といわれた日本が、今や韓国や中国に追い抜かれそうというのも、社会経済現象と軌を一にしている。

仕事の面では、1980 年頃から NTT で資材調達部門をやっていた関係で、NEC を筆頭に日本メーカーが海外に雄飛した象徴が NEC アルゼンチンであることを知っていた。そ

この工場から日本の交換機を世界中に輸出していたのだ。NTT 仕様では海外に売れないので、メーカーが独自仕様で売るのも黙認した。

近年では、テレビ放送のデジタル化のことが記憶に新しい。私は NTT コミュニケーションズが提供している全国テレビ中継網の「地デジ化」の責任者でもあった。これは伝送、交換（番組切換）のみならず MASCOT という無線屋が誇りにしてきた大規模コンピューターシステムの更改も伴った。その更改にとんでもないトラブルが起き、死ぬほど？の苦労をしたが、NTT の諸先輩、NTT コムウェア、NTT データ、関係メーカーなどの総力を結集して乗り切れた。

画期的なことはその後。地デジ化主幹の総務省が日本方式を海外にも普及させようということで、欧米方式と中国方式の手が伸びていなかった南米を狙って、当時の T 総務審議官を筆頭に獅子奮迅の活躍をしてくれた。総務審議官というのは英語では Vice Minister、つまり大臣の次、彼はそれを最大限に活用して、見事に南米の殆どの国に日本方式採用を決めた。私もアルゼンチンについてはタンゴのおかげもあり、当時の官房長官クラスの知人等々を T 審議官に繋ぎ、多少（かなり？）のお手伝いをした。問題はその後だった。テレビ中継網だけではなく、端末、つまりスマホを含むテレビ受信機も日本から入れてくれないかという各国の通信担当大臣の要請で T 審議官はこれまた東奔西走したが、当時、日本のメーカーは国内の高価でおいしい携帯端末に満足して、安い南米市場には目を向けなかった。そこで進出してきたのが韓国勢。情けないことに今日では南米の受信機は殆どサムソン、LG になっている。4 億人市場であったのに！これも日本電機メーカーの世界凋落を象徴する裏面史の一つだ。

最後に、アルゼンチンびいきとしては改めて以下のことを強調しておきたい。昨今の世界情勢はエネルギーと食料をめぐる争奪戦。それがベースとなった戦略的紛争に伴うプロパガンダとフェイクの情報戦争・経済戦争でもある。こうした際に、日本の致命線は言うまでもなく、資源と食料の低い自給率。食料で 38%、エネルギーで 12%である（2021 年）。穀物自給率でみると日本は 28%、179 カ国中 127 番目、OECD 加盟国 38 カ国中 32 番目（2019 年）である。それにひきかえ、アルゼンチンの穀物自給率は 277%、エネルギー自給率は 141%（2006 年）である。

多くの日本人にとっては、アルゼンチンというと、昔は『タンゴの国』今は『経済破綻の国』という印象。確かに 10 回程も破綻している。しかし、実情を知る者からすると、それでも国民は怒り悲しむが“明るい”のである。その根本は言うまでもない。豊かな食料と資源だ。日本の対極である。

偶然にもペリー来航の年から民間外交を含め日本との親睦の歴史が始まった国、日露戦争の勝利に結びついた戦艦日進・春日（元は巡洋艦リバダビア、モレーノ）を譲渡してくれた国、太平洋戦争後、真っ先に日本に援助食料を届けてくれた国、1961 年、当時タンゴ界の大御所フランシスコ・カナロ来日に併せて訪日したフロンディシ大統領を天皇陛下が羽田空港まで迎えに行ったほどの国、それがアルゼンチンであるということを、日本人は歴史の教訓として想い起こしていたい。

幸い（日本側が弱くなっているが）、アルゼンチン側は極めて良好な親日感情が続いている。最近は、何が「真」で何が「虚」なのか極めて分りにくく、日本を取り巻く状況も複雑さを増す世界にあって、食料や資源という基本的な人間の条件は（言うまでもなく）極めて重要である。その点で全く相補関係にある親日国と仲良くしておくことも安全保障の核心というものではなかろうか。今や狭い地球の真裏という距離は問題でない。国と国の関係においても、歴史や文化に根ざした、人間と人間の関わりということを根本に置いた発想こそが大切な時代を迎えている。

特別寄稿

岩槻日記(22)

当会特別顧問　石井　孝

「体験的アジャイル開発」

小生の現役当時はアジャイル開発などという言葉はなかったが、実質的なアジャイル開発を行っていたような気がする。

そこで、先般アジャイル開発を進めているという方の話を聞く機会があったので、我々が行っていた「体験的アジャイル開発」が真っ当なものであったか如何か聞いてみたのであるが、ピンとくる解答が得られなかったので、諸賢のご意見を伺いたく投稿する次第である。

ソフトウエアシステムというものは、最初の初期開発はほんの手始めであって、これに色々な機能が順次追加され、拡大し成長して行くものである。そして、システムは企業などが必要とする限り永遠に生き続けるのである。

その機能追加であるが、緊急を要するものは即刻行うが、そうでないものは複数項目を纏めて定期的に実行する。

定期、不定期にかかわらずプログラムを追加・変更するに当たっては、単に機能が間違いなく追加されるだけでなく、ソフトウエアシステム全体が整理整頓された形で拡大し成長して行けるような配慮が不可欠である。俗な言い方をすれば、子供が将来不良にならないように、愛情を持って厳し育てると言った感じである。

これを実行するためには、作業チームの構成を工夫する必要がある。出来上がりを速くするために、追加する機能ごとに担当者（仮称ファンクション・オナー）を設定して同時並行で作業を進める。

このファンクション・オナーが各々勝手にプログラムの追加・変更の作業を行っては、母体のソフトウエアシステムがめちゃくちゃになってしまう。

そこで、母体のソフトウエアを適当な機能モジュール単位に分割して、夫々に管理責任者（仮称モジュール・オナー）を置き、各ファンクション・オナーの追加・変更作業の交通整理を、モジュール・オナーが厳格に管理・サポートする。

こういったマトリックス体制を構築することが極めて重要なのである。こういった措置は、ソフトウエアシステム開発全てに留意すべきではないかと思うが、スピード開発をモットーとするアジャイル開発体制には特に大事である。

また、こういった仕掛けは内製体制が整っていないとうまくいかない。多重下請け体制などでは、とても無理な相談であろう。

「何故」

今日、一月二十六日は、真藤さんの命日である。真藤さんは 2003 年 1 月 26 日 92 歳で、遥か遠くの方に逝かれてしまった。

真藤さんの思い出についてはこのフェイスブックにも幾たびか投稿させていただいたが、電電公社生活に慣れ親しんだ私にとっては全く途方もなく大きな方であった。

ここの所、電々民営化を機に第二電電を創設された、真藤さんと縁がある稲盛さんの逝去を偲び、氏の経営者としての実績と偉大さを評価した書籍が色々と出版されえている。

真藤さんも、氏に勝るとも劣らない極めて傑出した技術畑出身の優れた経営者であっ

たと思うが、リクルート事件に巻き込まれたが故に、正当な評価が十分になされていない現状は残念至極である。
所で、かのリクルート事件である。田原総一朗のリクルート事件の実録「正義の罠」を読むと、愕然とする。真藤さんは、「何故」罪を着せれたのであろうか。
「正義の罠」によれば、真藤さんの主要な罪状として、リクルート社のクレイ社のコンピュータ購入に関する電々側のリクルート社への便宜供与が挙げられている。
しかしながら、事実は真逆で、リクルート社が日米間の貿易摩擦に苦戦する電電公社の国際調達業務の応援に一役買ってでたものであったと、「正義の罠」には、その様子が詳しく書かれている。

「改めて変ったなー」

通院などで比較的早めの電車に乗ると、サラリーマンとして通勤していたころとは全く違った光景に戸惑うこと暫しである。
その第一がスマホ・オンリー、十人が十人、全てスマホとにらめっこ、新聞など読んでいる人は誰一人として居ない。
そして服装、シャツなどは、わざわざ外にはみ出している。そのうち、プロ野球のユニフォームもはみだしになるのだろうか。
それか目に付くのが女性の素晴らしい体格。嘗て美人と言えば、小柄で細身、小股の切れ上がった一見なよなよとした女性が相場であった。所がどうだろう、最近の美人は堂々としているではないか。身長も体重も男性に比べて全く遜色が無い。うかうかしてしいるとはじきとばされそうである。
そうだ、こういった女性の代表に政治も任せたら安全保障も万全になるかもしれない。

「マイナンバーカード」

「マイナンバーカード」と健康保険証の統合について、色々と喧しいが、この種の統合化の進行はIT本来の姿で、どんどんと進めるべき話である。こうした統合化が上手く行けば、将来的には税務申告なども自動的に行なわれる事になるであろう。
ビジネスシステムのコンピュータとソフトウエアによるシステム化は、此れを使い始めると、次々に機能追加を重ねいく事により、極めて便利になる一方で、ソフトウエアはいつの間にか増殖し、気がつくとソフトウエアがすべてを支配してしまい、それなしでは何もできない状態になってしまう。
このため、秩序ある成長・発展ができるように管理することが肝要である。
それには、土台となるソフトウエアシステムがしっかりしているか、また、こうした増殖するソフトウエアシステムの維持管理する人的管理体制が整っているかが極めて重要なポイントとなる。
複数の銀行が統合したみずほ銀行のケースに於けるソフトウエアシステムの混乱状態をみれば、複数のソフトウエアシステムの統合とその維持管理が如何に注意を要するかが明白である。
この辺り問題を官庁体質のデジタル庁は十分に認識されて、万全の体制を整えて居るのであろうか。一番心配されるのはこの点である。

海外グラフィティ

奥山真司の「地政学」から学ぶもの

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

地政学に興味を持つビジネスパーソンが多い。軍事目的ではなく、しかし、実際に営業などと結びつける場合により身近に感ずるようだ。自分なりに解釈すると、①ビジュアライゼーション②拠点というものだ。①については、数字の羅列ではなく、分かりやすいグラフなどもその一つだ。②は、全国展開する場合の出発点としての拠点などだ。地政学を簡単にいうと、「国の地理的な条件を基に、他国との関係性や国際社会での行動を考える」というものだ。国際政治が「劇」なら、地政学は「舞台装置」でその舞台装置で最重要なのが「地図」である。

歴史のなかで、最も躍動的なのが、「大航海時代」なら、コロンブスのアメリカ大陸発見とマゼランの世界一周は、地政学上も大きな変化をもたらした。コロンブスが、最も手掛かりにしたのが、「マルコポーロ」の東方見聞録とプトレマイオスの世界地図であった。

例えば、マルコポーロの東方見聞録を現在の地図上に表すと、実に面白い。まず、ベネチアから出発し、コンスタンチノープル、中央アジアを経て陸路大都（北京）に着く、帰りは海路で、マラッカ、セイロン（スリランカ）を通り、ホルムズ海峡を経て、アルメニアを通り、ベネチアに帰還した。これを、自分は小さい地図を次第に拡大して一覧すると、文字でたどるよりわかりやすいのだ。まさにビジュアライゼーションである。その頃、最も栄えていた元の首都大都への各地の拠点の旅路である。帰りに、雲南省に寄っているのが意外であり、この頃から栄えていたのかと驚く。プトレマイオスの地図は現在の世界とは相当ことなる。まず、アフリカとアジアが陸続き、インド洋は内海で、セイロン島はバカでかい。大西洋も、太平洋も描かれてはいない。これが、その当時の世界であったのだ。

「大航海時代」を経て、大西洋も太平洋も認識され、それこそ、地図が大幅に書き換えられ、「地政学」上も大変革したのだ。面白いのは、当時も世界の中心だった中国が台頭し、新大陸のアメリカと対峙していることだ。奥山氏の説は陸地の王者と海の盟主がそれぞれ分をわきまえていればいいのだが、欲を出すと失敗する。例えば、東シナ海に進出や、一帯一路を目論む中国は将来うまくいかないだろうし、もともと海の帝王（太平洋と大西洋に挟まれたアメリカ）はベトナム戦でこけた。海の自然の要塞で守られた日本が、大陸に進出した太平洋戦争も敗戦で終わった。

奥山氏の「地政学」は生臭い。沖縄の軍事的重要性を説き、決してアメリカは手放さない。ロシアにとって北方領土もかなり重要視していると指摘。言われてみればまさに目からうろこである。幸いビジネスで、前記の拠点、ベネチア、コンスタンチノープル、北京、雲南、マラッカ、セイロンという今も変わらぬ拠点は巡った。拠点は重要である。点から面への展開でどうしても欠かせない場所だからだ。例えば、北海道に進出する場合、札幌に支店があるかどうかは重要で、既成の拠点・仙台から営業すれば良いというわけにはいかない。経営戦略、営業戦略などと、戦争用語が使われるが、地政学も例外ではない。（2020.12.31 完）

海外便り

やどかり族の中国俳柳紀行序章(2)

(1996 年 8 月 3 日～同 25 日)

元 JICA シニアボランティア
北垣　勝之

＜事務局注＞本稿はやや古いが、かえって新鮮であり、切にご寄稿をお願いしたものです。

8 月 7 日(水)

節竹寺に行く。昆明市内雲南飯店前から乗り合いバス(運賃 4 元/人)で約 40 分、市街を離れ小高い山に入る。うっそうとした樹林の中に寺があった。入場料外国人価格 10 元/人のところ中国人になりすまして 3 元/人で入山する。寺内を散策していると僧房二階の一角から大きな声がした。よく見ると茶色の僧衣をまとった一人の老僧が我々に向かってなにやら怒鳴っている。何か悪いことでもしたのか一瞬戸惑い、かかわり合いを避けるため無視しようとしたが、こちらを見据えて再三声をかけてくる。どうやら我々に彼のいる所に来いと言っているようだ。覚悟を固めて階段を上り彼の部屋を訪れることにした。四畳半位の狭い部屋には老僧ともう一人 68 歳位の尼僧が、ソファーに腰を下ろして我々が来るのを待っていた。彼は雲南省昆明市西郊玉案山節竹禅寺の圓照法師と言い当年 80 歳、かくしゃくたる態度で我々にお茶や菓子を勧める。私も壁に掛けてある彼の書画を称えながら仏教や世俗の話を楽しむ。数年前台湾に行ったとき記念に貰ったという腕時計も披露してくれた。どこにでもある並の時計ではあるが、きっと彼にとっては思い出深い貴重な品なのであろう。小一時間二人の僧との会話に花咲かせてから記念写真を撮り、部屋の奥に祀ってある本尊に参拝して高僧等と別れた。節竹寺では他に清の光緒帝時代につくられた五百羅漢の塑像が堂内いっぱい陳列されており、そのリアルな風貌が面白かった。こちらに来るバスの中で知り合ったオランダ人とイギリス人の男女大学生ペアーの勧めもあって、昼食は寺の精進料理(素食)を賞味することにした。4 品とったがいずれも油濃く我々の口には合わない感じである。昆明市内へは待ち時間のないミニバス(運賃 5 元/人)に乗って帰る。

外人にゃ異国情緒のお寺かな(昆明)

節竹寺高僧と交わす禅問答(昆明)

雲南飯店の前にある文具書籍店で四角い印鑑をつくることにした。2 日あれば篆刻できると言うので、今日依頼し大理から昆明に帰った日に受け取ればよい。雲南省博物館見学(入館料外国人 10 元/人)、少数民族についての展示など見応えのする博物館である。55 年前の抗日運動の資料もしっかり展示している。そこで出会った東京の女子大学生は、宿泊している茶花賓館からレンタサイクルで昆明市内を回っているそうだ。そして来年は一層中国語に磨きをかけるため雲南大学に留学する予定だと言う。今回はその下見の由、親は何と言うか分からないがタフな若者にむしろ頼もしさを覚える。

大きな荷物は昆明飯店に預け、簡単な食料を買い込んでいよいよ大理行き夜行寝台バスに乗り込む。雲南友好旅行社の窓口で中一日、往復夜行便しかないと言われ、やむなく二晩連続の寝台バスによる強行軍となる。我々の席は二段ベッドの上段、しかも天井にすぐ頭がつかえ横になるのが精一杯、窮屈な旅を強いられそうだ。客がいっぱいになるのを待って午後 10 時過ぎようやくバスは出発する。一度は乗ってみたいという好奇心から寝台長距離バスになったが、こりゃ大変な事になったというのが実感である。今さら止めるわけにもいかず、心を決めてなるべく安楽にできるよう狭い空間に身の置きどころを按配する。とにかく身動きできない。途中 2・3 カ所 15 分位のトイレ休憩だけで一路大理を目指し夜行バスは行く。言葉の上ではロマンチックな旅のイメージもあろうが、実際は夜通し削岩機の上で寝ているようなもので一睡もできなかったと言ってよい。おまけに途中のトイレはめちゃくちゃに汚く、男女とも全てドアー無しのオープントイレである。しかも使用料一人 2 角をしっかり徴収する。

8 月 8 日(木)
朝 7 時頃大理に着く。今回の大理旅行は中国人ツアー客に混じっての団体旅行である。朝食を済ませ、アールハイ湖のクルージングに出かける。途中 2 ヵ所(アールハイ公園・普陀堂)で上陸して名所の自由見学を行なう。約 200 人乗りの遊覧船で昼食をとり、白族ゆかりの三道茶をふるまわれる。あでやかな民族衣装を着た若い男女が繰り広げる民族舞踊が終わる頃、船は湖北の船着き場に到着、下船。バスで周城・胡蝶泉・三塔寺・大理城と巡り、下関で夕食後、再び昆明行き夜行寝台バスの乗客になる。この大理ツアーを通して北京から来た年配男女の三人と、それに甘粛省蘭州から来た若い親子連れ三人とは、食事の時はいつも一緒、何かにつけて言葉を交わしながら旅をした。彼等でさえ他の中国人旅行者のマナーの悪さには眉を顰め、トイレの汚さに閉口していたようだ。(次号に続く)

崇高な三塔猊下民安じ(大理)

鴨肉を商う人も多民族(昆明)

ウェブサロンの話、あれこれ

第 17 回 ICT 海外情報ウェブサロン(講演会)模様

事務局

第 17 回 ICT 海外情報ウェブサロン(講演会)が 2023 年 3 月 18 日(土)19 時～21 時、ウェブ会議室において開催された。一般財団法人日本 ITU 協会専務理事の田中和彦様から、「MWC 2023 見聞ともっと旅を楽しむ方法の提案」のご講演をいただいた。前半の「MWC2023 見聞」については今後、日本 ITU 協会の研究会などでの報告も計画されているとのことであり、同協会のホームページ(注)を参照してほしい。後半の「もっと旅を楽しむ方法の提案」に関する主な話題については、以下のとおりである。

(注)ITU ホームページ　https://www.ituaj.jp/

・その国・土地の音楽を収集している。例えば、アメリカ在住時はネイティブアメリカン音楽。韓国滞在時は伽耶琴(カヤグム)。今回のバルセロナではフラメンコ(ギター、パルマ、タップ、踊り)の CD を購入した。
・新しい技術で新しい体験、未知の臨場感、没入感を満たしている。例えば、パノラマ写真(スイングパノラマ写真、パノラマ合成写真)、全天球写真、全天球ビデオ、４Ｋビデオ＋ ハイレゾ・バイノーラル録音などである。
・パノラマ写真として、日本 ITU 協会のホームページに乳海攪拌を掲載している。

写真：日本ITU協会HP

https://www.ituaj.jp/00_sg/20220701_Samudra_Manthan/Samudra_Manthan.html

・武蔵野メディア研究所(MML)は個人的に活動しているものであり、広義(1997 年～)には、高速ネットワーク(インターネット、LAN)、最新デジタル技術(高速 PC、録音・録画デバイス等)を活用してみる試みとして、高速光回線(FTTH) + GbE + PC + NAS + TV + etc.で運営している。狭義(2013 年 12 月～)には、大容量個人ホームページ「武蔵野メディア研究所」として、商用 Web サービス(ぷらら、トコちゃんねる静岡) +自前サーバー(NAS x 2～3) で運営している。
・コンテンツの特徴は、(1)大容量ファイル→数 MB～数 GB、(2)オリジナルファイル→自家録音・録画、手作り、(3)バイリンガル対応→日本語ページ／英語ページ、(4)ダウンロード可能→そのままのファイルが入手可能、(5)無料→試行ベース、実験ベース、などである。作品とか完成品ではなく、見て・聴いて・試していただくことを期待している。トップページは下図のとおりであり、多数の事例を掲載しているので、ご覧いただければ幸いである。

武蔵野メディア研究所
トップページ

100+のタイトルにアクセス可能

URL：

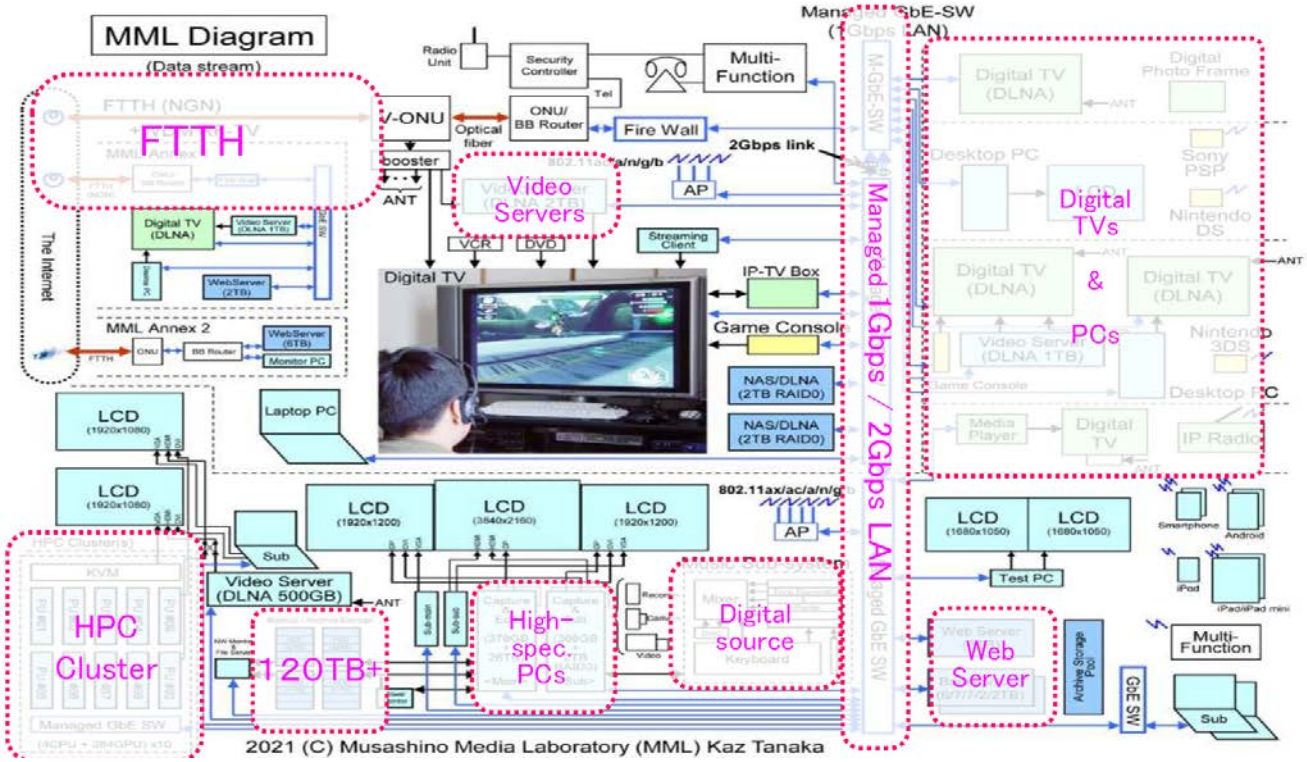
http://www13.plala.or.jp/mml/
又は
http://plaza3.dws.ne.jp/~mml/

検索キーワード：

武蔵野メディア研究所
又は
MML 1bit 4K

http://www13.plala.or.jp/mml/　又は　http://plaza3.dws.ne.jp/~mml/

・自宅に設置している MML のダイアグラムは下図のとおりである。

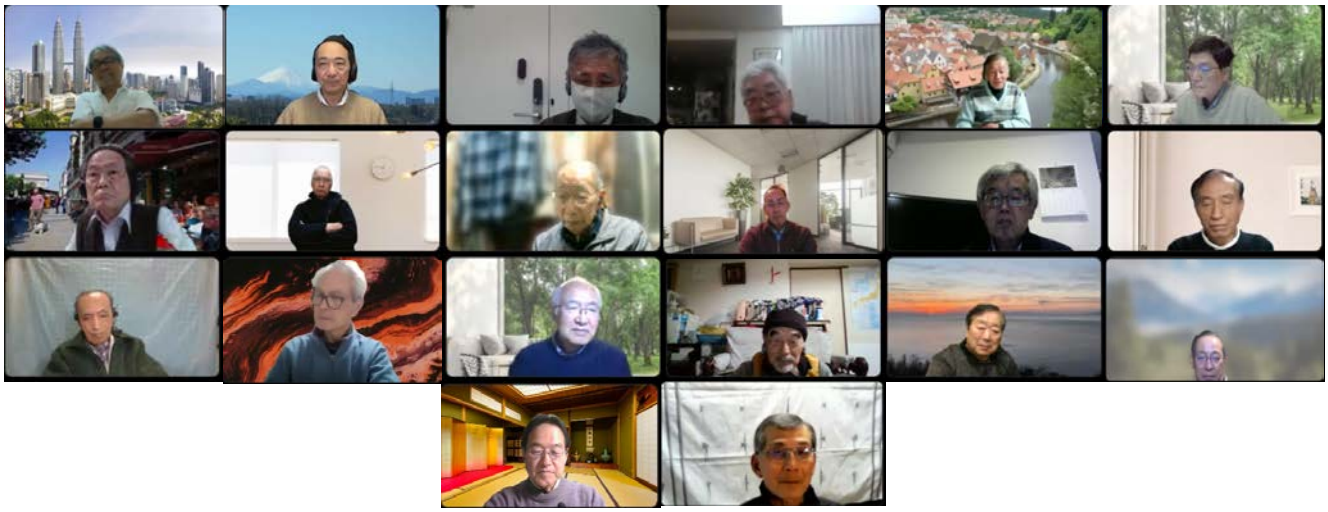


参加者からは多数の質疑・意見等があり、講師からも回答や示唆があり。活発で密度が濃く、真にウェブサロンの雰囲気であった。

・インターネットの時代になって、ルールも機器利用も昔の電話時代とはかなり異なってきたことを実感した。

・ドイツ人と展示会を共同実施したことがあるが、方法の違いを痛感したことがある。

・360 度カメラは山登りなどに使用すると、驚くような映像になる。
・全天球写真・ビデオは自分自身(頭)が写らないよう、テクニックが必要である。
・MML の設備は遠い将来も引き継がれるか。
・NTT の ITU 支援に熱気があることを期待する。
・ITU-T 局長に尾上誠蔵様が当選、就任されたことは大きな成果であり、注力していることの証拠である。IOWN 構想との関連も期待される。
・ICT に関する主戦場が変化していると思う。日本人が GAFA と同じ土俵では戦えない。インフラビジネスはなくならない。IOWN などの分野に期待している。
・下記のような報道もあり、APN(全光ネットワーク)の導入は既に開始されており、普遍化も意外に早いかも知れない。
① NTT 東西、「IOWN1.0」を 3 月 16 日提供開始。低遅延＆ゆらぎゼロの“オールフォトニクスネットワーク”
https://internet.watch.impress.co.jp/docs/news/1482781.html
② NTT と KDDI、光ネットワーク技術のグローバル標準化に向けた基本合意書を締結
https://internet.watch.impress.co.jp/docs/news/1486609.html
・WBC において、米国で活躍する日本選手が目覚ましい動きをしているが、NTT も世界に羽ばたいてほしい。
・高齢になっても活動できることに取り組んでいる。



編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 107 号を発行することができました。今回は当会の飯塚顧問から「昨今の世界情勢に思う～アルゼンチンびいきの独り言」の特別寄稿をいただくとともに、岩槻日記、海外グラフィティ、俳柳紀行のご寄稿継続をいただき、誠にありがとうございます。

これまでのご協力に改めて心より感謝するとともに、当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなる会報へのご寄稿と ICT 海外情報ウェブサロンへのご参加をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。
https://ictov.jimdo.com/コメント/

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　空席のため募集中（編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)